

共同住宅建設に伴う

大苗代遺跡発掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書 第三十八集

2002

泉南市教育委員会



序 文

泉南市は近年の開発の増加に伴い、その姿を大きく変えてきました。とくに空港建設時はバブル景気もありまつて開発が相次ぎ、その結果幸か不幸か、多くの遺跡が周知され、遺跡の数も飛躍的に増大することとなりました。

本書で報告します大苗代遺跡も、開発に伴う試掘調査によって新たに発見された遺跡です。本遺跡が立地する櫻井川左岸地域は平安時代後期から鎌倉時代を中心とした中世の時期大規模な開発が行われた地域であると考えられます。本遺跡においても、溝や柱穴など、それらの考えを補強しうる遺構、遺物が数多く見つかり一層の研究進展が期待されます。

最後になりましたが調査に際しご協力、ご理解をいただきました関係者の皆様に対しまして御礼申し上げますとともに、文化財保護行政により一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月31日

泉南市教育委員会
教育長 亀田 章道

例 言

1. 本書は、泉南市信達大苗代697-4 地内における共同住宅建設に伴う大苗代遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査は、同地内の工事に伴い泉南市教育委員会が試掘調査を行った結果、遺跡が発見され（株）熊取谷工務店（代）熊取谷隆の遺跡発見届出書にもとづいて行った。
3. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課 石橋広和を担当者として平成3年4月22日から5月14日まで行った。
4. 本書の執筆・編集は石橋が行った。
5. 調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望む。

凡 例

1. 本書の地形図等の北方位は座標北を表し、図の数値は国土座標第IV系（km）を使用している。
2. 本書記載のレベル高はT.P.（東京湾標準位）+の数値を使用しているが、T.P.の記号は省略している。
3. 遺構名称は、SD-溝、SK-土坑としている。
4. 遺物実測図の断面は、須恵器-黒塗り、土師器-白抜き、瓦器、瓦質土器-トーン、瓦-斜線のように塗り分けている。
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』1988年版に準拠した。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と周辺遺跡の調査	1
第Ⅱ章 層序	1
第Ⅲ章 検出遺構	2
第Ⅳ章 出土遺物	5
第Ⅴ章 まとめ	7
報告書抄録	卷末

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図及び周辺の遺跡分布図	1
第2図 遺構平面図・土層断面図	3・4
第3図 SD 01～03土層断面図	5
第4図 出土遺物	6
第5図 出土した瓦	7

図 版 目 次

- PL. 1 トレンチ全景（東から）・SD01～03詳細（西から）・SD01土層断面A-B間（西から）・SD02土層断面C-D間（東から）・SD03土層断面G-H間（西から）
- PL. 2 SD1～03全景（東から）・SD01及びピット群（北から）・SK02（南から）・ピット群（西から）・北壁土層断面

第Ⅰ章 調査に至る経緯と周辺遺跡の調査（第1図）

大苗代遺跡は、泉南市信達大苗代地内に位置する。信達大苗代697-4地内において、平成3年2月14日に共同住宅建設に伴う試掘調査によって発見・周知された。発見届が文化庁長官宛に提出され協議の結果、基礎掘削によって破壊される304.8m²について本調査が必要であるとの結論に至り、平成3年4月22日から5月14日まで発掘調査を行った。

遺跡は、本市と泉佐野市・田尻町を分ける櫻井川左岸に披がる低位段丘面上に立地している。1990年代以降、この付近で遺跡の発見が相繼いだ。最も古いものは、北西約800mに位置する岡田西遺跡^①から有舌尖頭器が出土し、最も櫻井川よりに位置する岡田東遺跡では、縄文土器早期の遺構・遺物が検出されている。弥生時代では、岡田西遺跡の北西にあたる氏の松遺跡から弥生時代前期の集落や、岡田東遺跡から終末期の土坑などが確認されている。古墳時代では、岡田東遺跡から後期の堅穴住居や掘立柱建物などの集落に関連する遺構が確認されている。古代では、北東約500mに白鳳時代から平安時代に至る海会寺跡^②とその建立氏族の集落が確認されている。しかし、この付近の遺跡のはほとんどは平安時代末期から鎌倉時代以降のものである。岡田西遺跡^③、中小路西遺跡などからは、大規模な水田耕作に伴うと考えられる水路、区画溝、耕作痕など多くの遺構が見つかっている。また、南西に隣接する仏性寺跡^④は、平安時代末に建立されたものと考えられ、さらに北方約500mの新伝寺遺跡^⑤からは、鎌倉時代の区画溝を持つ屋敷なども確認されている。また、熊野街道も東方約100mの付近に推定されている。

以上のように、櫻井川左岸地域の一部を除いてほとんどの遺跡では、中世を画期としている。大苗代遺跡においても出土遺物の大部分は中世以降のものであることから、その傾向が肯定できる。

なお、本調査の結果は、過去に断片的に執筆されているが、遺跡の評価や時期など異なる点のある場合は、本文をもって正報告とする。

第Ⅱ章 層序（PL. 2、第2図）

調査地はかなりの盛土が施されており、最も薄い部分でも約70cmを測る。これを除去すると、現代の耕作面が存在するが、ほとんどの部分で削平されている。この下層は、現代の床土（褐色砂質シルト約10cm）、4層以上の旧耕作土（約50cm）が続く。これら旧耕作土層は上層は砂質で、下層はやや粘性を呈している。これらを掘削すると、褐色粘性シルト層が10~15cmが確認された。マンガ



第1図 調査区位置図及び周辺の遺跡分布図

ンを非常に多く含んでおり、一部の遺構は、この層の上面から切り込んでいるものもあった。この下層には地山である明褐色粘性シルトが確認された。部分的にはかなりの攪乱が認められ、一部は地山面まで達している部分もあった。地山のレベルは、東から西に向かってわずかずつ下がっており、東端で約16.4m、西端で約16.0mを測る。

第Ⅲ章 検出遺構（PL. 1・2、第2・3図）

遺構は、約60カ所確認した。最も注目されるのは、トレントほぼ中央にSD01～03の3条の溝を検出したことである。ピットも多く検出し柱穴になると思われるもの多いが、明確な掘立柱建物としては確認することはできなかった。その他土坑・落ち込み状遺構などいくつか検出された。

SD01～03は、ほぼ南東から北西の方向に向かって3条とも並んで検出された。いずれも北西の方向に対して弧を描くように緩やかに屈曲していることがわかる。また、砂粒が多く堆積することからいずれの溝も水が流れているものと考えられ、溝底面の比高差から北東方向から南北方向へ流れていったと考えられる。遺構の肩の部分はかなり乱れた状態で検出されている。トレント内では切り合い関係は見られなかったが、南壁と北壁の断面においてSD01がSD02に切られていることを確認した。なおSD03と他の2条との切り合いは確認できなかった。

SD01は、幅約0.7～1.5m、深さ10～20cm程度で最も浅い。特に北西半分では、削平が著しく痕跡程度であった。断面は、緩やかな凹面形であるが、遺構の内部は凹凸がかなりある。北東半分では、拳大の河原石が多く出土したが、いずれも人為的に並べられたような痕跡はない。また、一部の石は火を受け、赤褐色に変色しているものもあった。埋土は、ほとんどが粗砂層でマンガンを含んでおり、かなり急速な堆積と考えられる。遺物は、須恵器の高台部分と考えられるもの（30）や平瓦（32）等が出土している。

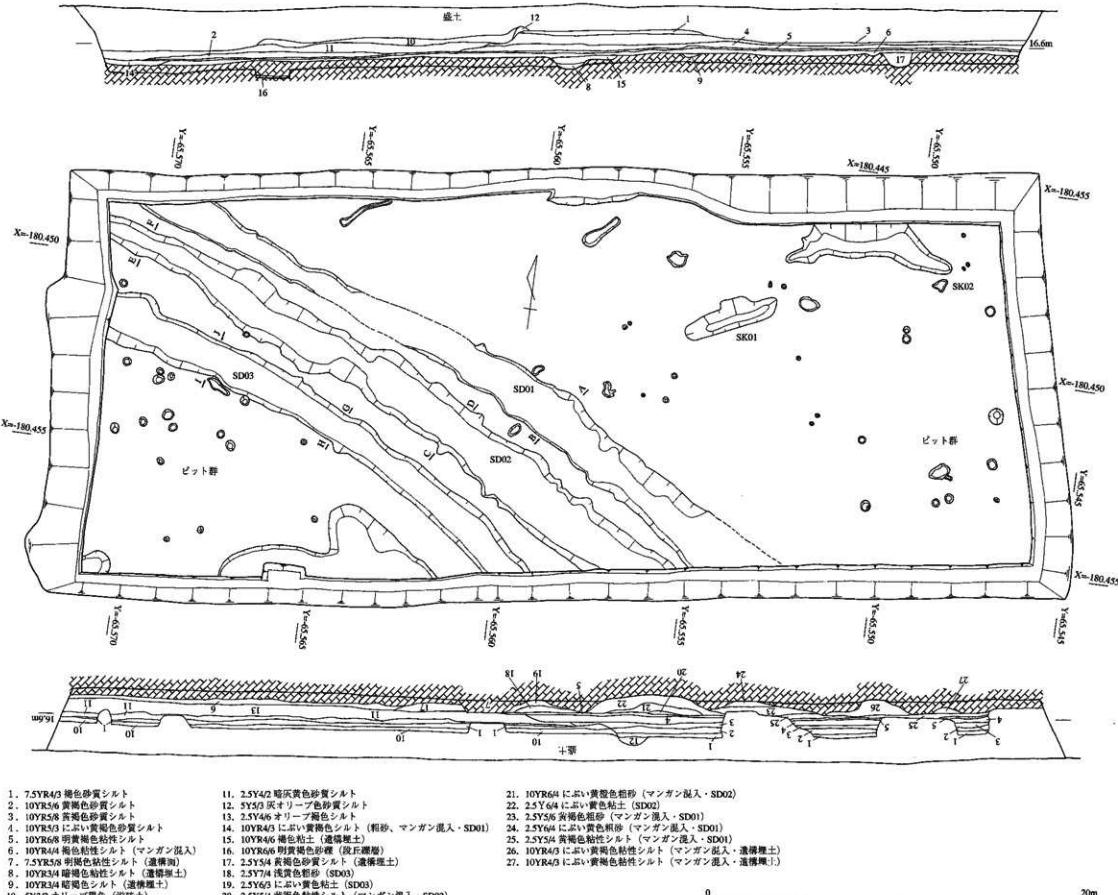
SD02は、幅約1.5m、深さ30～50cmを測るが、トレント北西端部分では幅0.5m前後になる。遺構の輪郭は、部分的に乱れている。断面は、緩やかな凹面形である。埋土は、上層のみに粗砂層が見られた他はシルト質で、下層ほど粘性が強い。また遺構の内部は、SD01同様かなりの凹凸がある。遺物は出土しなかった。

SD03は、幅約1m、深さ20～40cmを測るが、トレント北西部では幅1.3m前後になる。断面は中央のごく一部でU字形を呈するが、その他の部分は緩やかな凹面形である。また遺構の内部は、かなりの凹凸がみられる。埋土は、下層ほどきめの細かいシルトや粘土、上層には粗砂層が見られ、かなり明確な分層が可能である。遺物は、平瓦（34）が1点出土している。

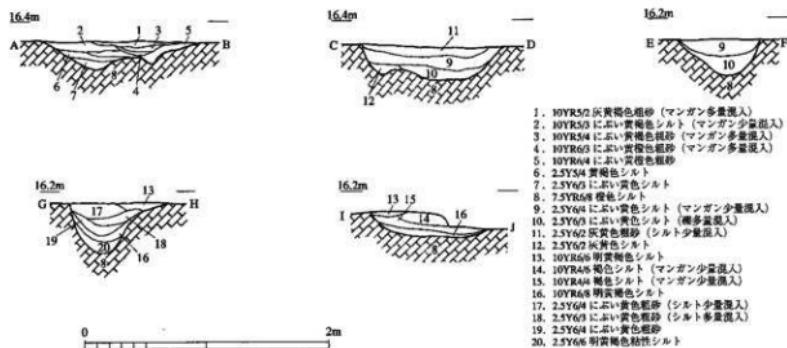
SK01は、トレント中央東寄りに位置する。径2.6m×0.8m、深さ約30cmを測る。平面形は長楕円形を呈し、断面は逆三角形を呈する。埋土は、褐色の粘性の強いシルトである。遺物は出土しなかったが遺構の形状から、墓壙の可能性もある。

SK02は、トレント北東端に位置する。径0.4m×0.5m、深さ約10cmを測る。平面形は不整形を呈する。埋土は、にぶい黄褐色シルトの1層である。遺物は、須恵器の臺（31）が出土している。この他、SK02と同様の小規模な土坑が数基検出されたが、遺物は出土しなかった。

ピット群は、トレント南西部のSD03に囲まれた部分とトレントの東側の2カ所に確認された。い



第2図 造構平面図・土層断面図



第3図 SD01~03土層断面図

ずれも明確な掘立柱建物としては確認できない。また、トレンチ南西部のピット群の埋土は、灰褐色系であるのに対してトレンチ東側ピット群のそれは褐色または暗褐色のものが多い。

第IV章 出土遺物 (第4・5図)

遺物は、大半が包含層からの出土で、遺構からの出土遺物は極めて少ない。時期的には中世の土器が最も多く出土している一方、古墳時代や古代のものもある程度出土している。

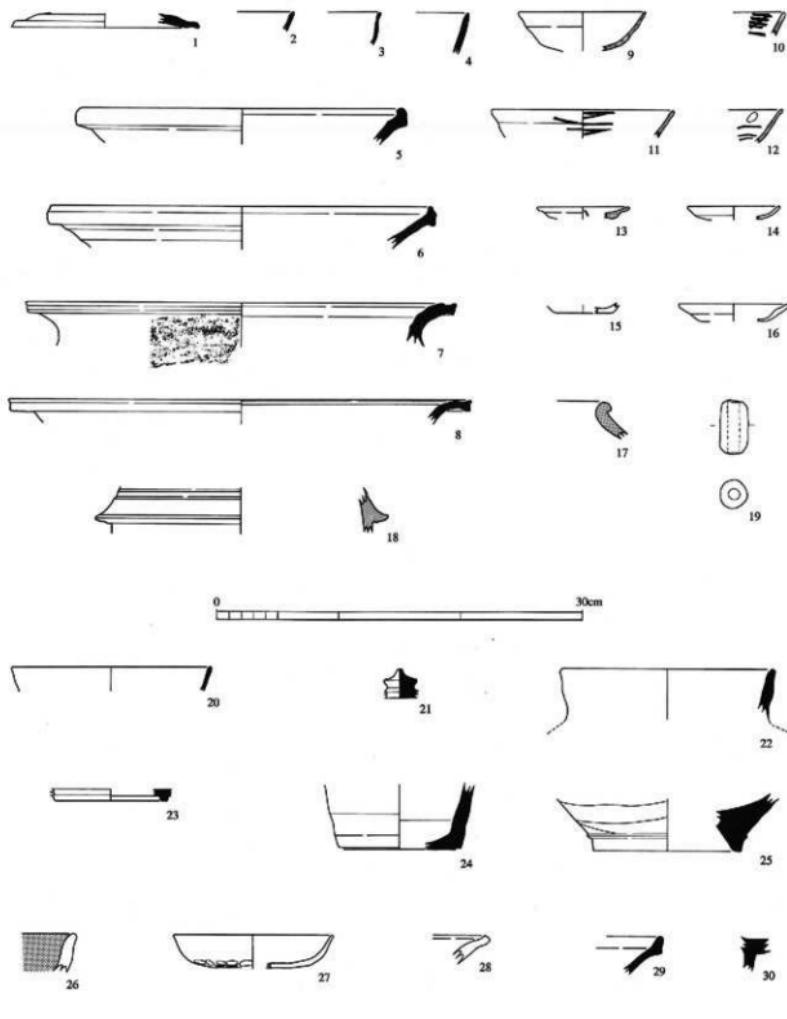
1~29・33は包含層出土である。

このうち1~19は、床土下の旧耕作土層から出土したものである。

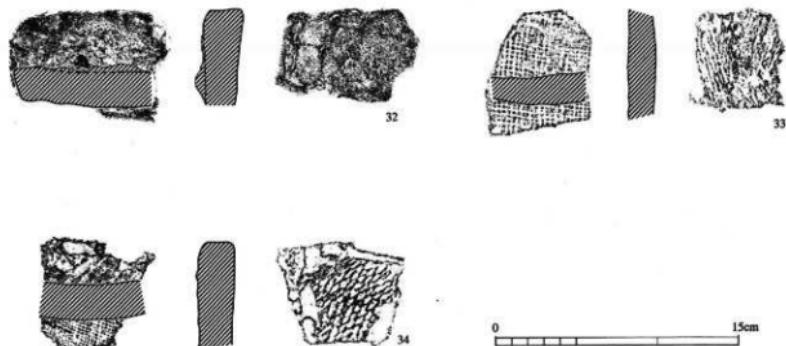
1~4は、古代の須恵器の蓋及び杯である。いずれも回転ナデが施されている。胎土は比較的精良で、焼成も良好である。5~8は、東播系の須恵器である。鉢は、口縁部内面が弧を描いて立ち上がり外縁は下方へやや拡張する（5）と、口縁部外面が垂下する（6）がある。いずれも重ね焼痕が明瞭に認められる。甕は、大きく外反する口縁部のものである。7は、口縁部外面に擦消しタタキが認められる。8は、やや器壁が薄手のものである。9~13は、瓦器である。椀（9~12）は口縁部に向かって大きく開き、ミガキも簡略化されたものが多い。皿は13だけである。14~16は、土師器の皿である。14は小型で、15・16は比較的大型のものである。いずれも破片で、摩滅が著しい。17は瓦質の甕、18は羽釜である。いずれも全体に摩滅が著しい。19は、土鍤である。ラグビーボール状を呈する。

20~29・33は旧耕作土の下層および、褐色粘性シルト層から出土したものである。

20~25は、古代の須恵器である。20は、杯である。回転ナデによって仕上げられる。胎土は精良で、焼成は良好である。21は蓋の把手、22は短頭甕、23は杯の高台部分と考えられる。24は平底でまっすぐ立ち上がる鉢と考えられる。25は台付の鉢または甕と考えられる。外面には荒い回転ヘラケズギが施される。24・25は、いずれも砂粒を多く含み荒い胎土で、焼成も悪い。26は黒色土器と考えられる。かなり分厚い口縁部で内面だけが黒色化している。27は土師器の皿である。底部を



第4図 出土遺物



第5図 出土した瓦

指頭圧痕によって仕上げられている。28は紀伊系の壺の口縁部である。端部がわずかに上方につまみ上げられるものである。29は東播系須恵器の捏鉢である。

30・31は、遺構出土である。30はSD01から出土している。須恵器の鉢または壺の高台部分と考えられる。内面は粗雑なナデであるが、外面は丁寧なナデを施す。

31は、須恵器の大型壺の口縁部である。外面は二段以上の回転櫛描文が施される。内面はわずかに灰をかぶっている。SK02から出土している。

32~34は、平瓦である。32は、凸面には繩タタキ目がわずかに認められるが、凹面は摩滅とマンガンが付着しているため不明である。端縁、側縁ともに鋭く面取りされている。焼成は不良である。SD01から出土している。33は、凸面は繩タタキ目、凹面は布目が明瞭に認められる。端縁、側縁ともに欠損している。焼成は良好で比較的薄手のものである。褐色粘性シルトからの出土である。34は凸面は繩タタキ目、凹面は布目が明瞭に認められ、端縁は鋭く面取りされている。SD03から出土している。

第V章 まとめ

以上の調査成果から、遺跡の推移と若干の考察を行なってみたい。

出土した遺物の中で最も古いものは、國化できなかつたが弥生時代終末期と考えられるものがごく僅かに存在する。市域だけではなく泉州地域においては弥生時代の終末期になると小規模な集落が増加する傾向にあることから、付近にも同様に集落が存在する可能性が高い。

この後の古墳時代前期から中期にかけての遺物は全く出土していない。古墳時代後期ではSK02から出土した壺は6世紀代に遡り得るものであり、包含層からも若干の同時期の遺物が出土していることから当該期の集落も存在する可能性が高くなつた。

古代においては、遺構は検出されなかつたものの遺物はある程度出土している。近接する海会寺跡の建立氏族の集落においては、この時期を通して大規模な居館が営まれており、本調査における遺物

の出土は、この時期に海会寺を中心に広範囲に人々が活動していた結果であろう。

最も多く遺物が出土しているのは、平安時代末から鎌倉時代のものである。検出された遺構の大半はこの時期に属するものと考えられ、特にトレンチ東側で検出されたピット群は建物跡としてはっきりと見いだせなかつたが、ほとんどが柱穴と考えられ、まさにこの時期の集落の中心となるものであろう。一方、トレンチに中央を縦断する形で検出されたSD01～03は、検出された東側のピット群とは逆方向に弧を描いて検出されており、区画、集落の排水の機能いずれにも当てはまらない可能性がある。今後の近隣の調査結果を待たなければならない。

この後の南北朝時代から室町時代になると、遺物は再び減少している。これ以降、この付近は耕化され、現代に至ったことは盛土下の分厚い旧耕作土がそれを物語っているといえるだろう。

- 註 ① 泉南市教育委員会「市道市場岡田線新設に伴う岡出西・氏の松遺跡発掘調査報告書」1995
② 泉南市教育委員会「岡出東遺跡の調査」「泉南市遺跡群発掘調査報告書X」1993
③ ①と同じ。
④ 泉南市教育委員会「海会寺」1985
⑤ ①と同じ。
⑥ 泉南市教育委員会「中小路西遺跡の調査」「泉南市遺跡群発掘調査報告書XI」1994
⑦ 泉南市教育委員会「仏性寺跡の調査」「泉南市遺跡群発掘調査報告書V」1987
⑧ 泉南市教育委員会「新伝寺遺跡」「泉南市文化財年報No.1」1995
⑨ 泉南市教育委員会「大苗代遺跡・I」「泉南市文化財年報No.1」1995



トレンチ全景（東から）



SD01～03詳細（西から）



SD01土層断面A-B間（西から）



SD02土層断面C-D間（東から）



SD03土層断面G-H間（西から）



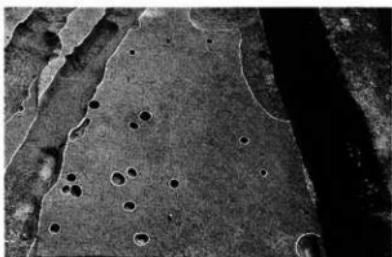
SD1~03全景（東から）



SD01及びピット群（北から）



SK02（南から）



ピット群（西から）



北壁土層断面

報告書抄録

ふりがな	きょうどうじゅうたくけんせつにともなうおのしろいせきはくつちょうじほくしょ						
書名	共同住宅建設に伴う大苗代遺跡発掘調査報告書						
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第38集						
編著者名	石橋広和						
編集機関	泉南市教育委員会						
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井1-1-1 Tel.0724-83-0001						
発行年月日	西暦 2002年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村名	北緯 遺跡	東經	調査期間	調査面積	調査原因
大苗代遺跡	大阪府泉南市 信達大苗代	27228	ONS	34度 22分 135秒	135度 17分 12秒	19910422~0514	304.8m ² 共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
大苗代遺跡	集落	中世	溝・土坑・ 柱穴	須恵器・土師器・黒 色土器・瓦器・瓦質 土器・瓦など		中世の集落と溝を 3条検出	

共同住宅建設に伴う
大苗代遺跡発掘調査報告書
泉南市文化財調査報告書 第38集

2002年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会
泉南市樽井1丁目1番1号
Tel. 0724-83-0001
印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

